

J **apanese text**

2018年 秋/冬号 日本語編

ジャポニスム
2018

Japonismes 2018

——日仏友好160年の祭典

撮影=八田政玄 (P.30)、西村彩子 (P.32-34)、大見謝星斗 (P.35-38)
スタイリング=阿部美恵 (P.35-38)
文=岡崎 香 (P.32-34)、編集部

p.028

日仏友好 160 年にあたる 2018 年夏から翌年 2 月にかけて、パリを中心に大規模な日本文化紹介行事「ジャポニスム 2018：響きあう魂」が開催されます。歌舞伎・能・狂言、雅楽等の伝統芸能から、現代演劇に美術展、マンガ・アニメ展、日本映画の上映まで、幅広いイベントが目白押しです。本誌特別インタビューや撮り下ろしグラビアを通して、そんなジャポニスム 2018 の魅力に迫ります。

エッフェル塔
——ライトアップ

パリのランドマークに日本文化を投影するという、ジャポニスム 2018 を体現した光のアート作品。7 分のライトパフォーマンスと、3 分のシンボリックイメージのプロジェクションによる計 10 分間のプログラムが、二夜に亘って繰り返し上映され、ジャポニスム 2018 のハイライトを華やかに彩る。

フランスのランドマークに日本文化が映し出される

ライトアップ発祥の地と言われるフランス。そのフランスの顔として、夜ごと美しい光を浴び続けてきたエッフェル塔が、このたびはじめて日本をテーマにした光を纏う。光のデザインを担うのは日本を代表する照明デザイナーの母娘、石井幹子さんと石井りーサ明理さんだ。

ジャポニスム 2018 のハイライトとして行われるこのイベントでは、9 月 13 日と 14 日の二夜に亘り、合計 10 分のプロ

グラムが繰り返し上映される。

最初の 7 分は「自由と美、そして多様性 (Liberté, Beauté, Diversité)」をテーマにしたライトパフォーマンス。フランス革命後の民主主義スローガンとして知られる「Liberté (自由)、Egalité (平等)、Fraternité (友愛)」から 200 年以上経った今、日本とフランスが目指すべき方向性を 1 年間の熟考の末導き出した。

シンセサイザーでアレンジされた雅楽にのせてエッフェル塔から日が昇る演出に続き、自由・美・多様性をテーマにした光と音のストーリーが始まる。自由の章では世界最新の特殊機材を駆使したあでやかな光が交錯し、続く美の章では日本の伝統的な美のモチーフ「雪月花」や選りすぐりの美術品をプロジェクションマッピングで投影、そして多様性の章ではさまざまな光の色や模様を駆使した最新の演出が、横笛や和太鼓の音にのり、まるで塔自体が踊りだすような盛り上がりを見せるという。日本とフランスが目指す多様な社会が切り拓く、未来に向けた光のメッセージだ。

続く 3 分間は打って変わってゆったりとたゆたうようなプロジェクションマッピング。日本を代表する尾形光琳作の国宝「燕子花図屏風」が、同時代の作曲家・八橋検校の「乱」の音にのせてエッフェル塔に投影される。このプロジェクトのために新しく開発された金色の光の LED 投光器が、屏風の金地を華やかに表現する。かつて「黄金の国」とも呼ばれた日本を象徴する金色が揺らめきながら、見る人々を日本美の世界へと誘う。

エッフェル塔特別ライトアップ

9 月 13 日、14 日の 2 夜

20 時 30 分～ 25 時

パリ・エッフェル塔 トロカデロ広場側

Champs de Mars, 5 Avenue Anatole France, Paris

p.030

時代を導く金色の光

「新しいプロジェクトのときは、かならず何か新しい試み

(Something New) をするようにしています。それはもう職業的な使命ですね」と凜と背筋を伸ばして語るのは、照明デザイナーの石井幹子さん。9月のエッフェル塔ライトアップに際しては、史上初の金色光のLED投光器の開発を依頼した。実際の研究にあたったのは日本のスタンレー電気。主に車のヘッドライトを作っている「技術力のある会社」だ。「光の三原色である青・緑・赤による混色はいろいろできるのですが、金も含めた黄色は合成してもうまく作れない色」イメージすべきは金屏風の色。白熱灯の「黄色に近い白色」ではない。琳派の名画「燕子花図屏風」をエッフェル塔に投影するには、このまだ誰も見たことのない光の開発が不可欠だった。

「浮世絵はフランスでも人気ですが、琳派となるとまだ意外に知られていないんです。今回燕子花図屏風を題材に選んだのには技術的な問題も含めて色々な理由がありますが、一番は二人ともこの絵が大好きで、沢山の人の見てもらいたかったということ。ジャポニスム2018では琳派の展覧会もありますし、良い機会だと思いました」と語るのは娘の石井リーサ明理さん。「青と緑、そして地の金という3色のみで構成され、構図としても非常に大胆。世界に誇れる作品ですね」と顔をほころばせる。

「更に金をきらきらと輝かせるために、狭い配光のシャープな光にしてもらいました」と幹子さん。この投光器をなんと120台、橋の上において、塔全体を照らし上げる。関わっている人数は総勢約80人。日本からは4~5人で、あとは現地フランスのチーム。まさに日仏交流の現場と言える。「フランスは光に興味のある人が多く、現場もとても良いムードです」。

とはいえ最初から順風満帆ではなかった。日仏交流のシンボルとしてエッフェル塔を選んだものの、この隙間の多い鉄骨建築に絵画を投影すると聞いて、「うまくいくはずがない」と最初はパリ市からGOが出なかったという。そこを説得し、深夜に大規模な投影実験をして見せて、ようやくの了解となった。「フランスのかたは光に対して目が肥えているので大変です」と小さく笑いあふ二人は、母娘であり、同志であり

かけがえない友人という印象を受ける。そんな二人が紡ぎ出す光のショーときらめく絵画、そして金色の光は、後世に語り継がれるものとなるだろう。

白熱灯ができたとき、蛍光灯ができたとき、いちはやくパリでそれらが灯されたのはエッフェル塔だった。今回、金色のLEDもまた、2018年9月の夜空に初めて、エッフェル塔を照らし上げる。

石井幹子 (いしい・もとこ)

石井幹子デザイン事務所代表。建築照明、都市照明から、ライトオブジェの制作、今回のような光のパフォーマンスまで、幅広い光の領域を開拓する世界的照明デザイナー。主な照明作品：東京タワー、レインボーブリッジ、白川郷合掌集落、浅草寺、洞爺湖サミット、ベルリン・ブランデンブルク門・平和の光のメッセージ、ジェッタ迎賓館（サウジアラビア）ほか。2018年以降は隅田川の橋梁照明を担当するなど、忙しい日々が続く。

www.motoko-ishii.co.jp

石井リーサ明理 (いしい・リーさ・あかり)

I.C.O.N. 代表。東京、ロサンゼルス、パリにて学んだ後、ハードウェア・プランストン&パートナーズ社(N.Y.)、石井幹子デザイン事務所勤務後、ライト・シーブル社(パリ)に移籍。2004年に独立して株式会社I.C.O.N.を設立。パリと東京を拠点に、国際的な照明プロジェクトに数多く携わる。主な照明作品：ポンピドゥー・センター・メッツ、歌舞伎座、リヨン光の祭典出品作、ほか。現在も都市照明計画など30件以上の仕事を抱えている。

www.icon-lighting.com

燕子花図屏 (かきつばたずびょうぶ)

国宝 尾形光琳筆 根津美術館蔵

江戸時代 18世紀 6曲1双 (各)縦151.2cm 横358.8cm

総金地の屏風に、群青と緑青の濃淡によって鮮烈に描きだされた燕子花の群生。左右隻の対照も計算しつつ、リズムカルに配置された燕子花の意匠性はもちろん、顔料の特性をいかした花卉のふっくらとした表現もみごと。江戸時代のみならず、日本の絵画史全体を代表する作品とって過言ではない。今回ジャポニスム2018での実物の展示はないが、毎年4月中旬~5月初旬の燕子花のときに、東京の根津美術館にて展示される。

p.030

●日本の宝がパリに集結

17世紀に生まれた琳派は、デフォルメやトリミングといったこれまでの日本絵画になかった手法を用い、装飾性豊かなオリジナルのスタイルを確立。今日のグラフィックデザインに通じるような造形は、本阿弥光悦、俵屋宗達から、尾形光琳・乾山、近代の神坂雪佳に至るまで、古典的な要素を含みつつも、常にその時代における新しい美として受け継がれてきた。

今回の展覧会では、琳派が生まれた京都での作品に絞り、国宝、重要文化財を含めた選りすぐりの傑作を展示。絵画はもちろん、書跡、陶芸、漆工などの調度品も取り上げ、琳派の総合性を示す。

国宝《風神雷神図屏風》俵屋宗達筆 京都・建仁寺蔵 江戸時代17世紀 二曲一双

「京都の宝—琳派300年の創造」展

10月26日～2019年1月27日

パリ市立テラス・ヌスキ美術館

7 Avenue Velasquez, Paris

p.031

●欧州初の大規模な若冲展

その緻密な描写と色彩で、国内でも絶大な人気を誇る伊藤若冲。なかでも最高傑作とされる『動植綵絵』(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)は、動植物の丹念な観察を通じて得られた現実の姿と、空想の世界を絵画として具現化した作品で、その驚くべき細密な描写と極彩色で描き上げられた花鳥画は、芸術的にも技巧的にも、日本美術の最高水準を示すもの。

今回の展示は「ジャポニスム2018」のメインプロジェクトの一つとして、若冲の代表作『釈迦三尊像』と『動植綵絵』全33幅を欧州にて初公開する。

《老松白鳳図》(動植綵絵 30幅のうち)

江戸時代18世紀 宮内庁三の丸尚蔵館蔵

《群鶏図》(動植綵絵 30幅のうち)

江戸時代18世紀 宮内庁三の丸尚蔵館蔵

「若冲—動植綵絵—を中心に」展

9月15日～10月14日

パリ市立ブティ・パレ美術館

Avenue Winston Churchill, Paris

野田秀樹

—舞台—

p.032

日本演劇界をリードする野田秀樹が脚本・演出を手掛ける『贋作 桜の森の満開の下』。1989年の初演以来、野田作品の中でも伝説となっているこの舞台が、日本を代表する最強のキャスト&スタッフによって、初めて海外で上演される。

演劇界のトップランナーが紡ぐ唯一無二の世界

1980年代から現代日本演劇界のトップを走り続ける劇作家・演出家・俳優、野田秀樹。9月末から国立シヤイヨー劇場で上演される『贋作 桜の森の満開の下』は、彼の代表作の一つだ。「日本の素晴らしい作品が集結する「ジャポニスム2018」の公演ならば、ぜひ野田秀樹作品を！」という同劇場からの直々のラブコールで、上演が決定した。

国立シヤイヨー劇場が野田作品を招聘するのは、野田が英国人キャストと英語で上演した2014年の4人芝居『THE BEE』English Version、総勢60人もの日本人キャスト&スタッフを率い、字幕を使って日本語で上演した2015年の『エッグ』に続いて、今回が3回目。高い身体性と深遠なテーマに裏打ちされた、圧倒的なパフォーマンスとスピーディな展開は観客を魅了し、高い評価を得ている。

「国立シヤイヨー劇場は、ダンスを中心としたフィジカル系の作品を多く上演している劇場なので、お客さんもまずビジュアルから受け入れて、動きを喜んでくれたみたいですね。しかもストーリーがあるというところで、僕の作品は評判になっているんじゃないかなと思います」

そう話す野田は、今年6月に同劇場で開かれた今期のプログラム発表会と懇談会にも出席。劇場会員が新たな野田作品に寄せる期待感を、肌で感じることができたという。

「そもそものきっかけは、国立シヤイヨー劇場の芸術監督ディエ・デシャンが、ロンドンで公演中だった『THE BEE』を観に来てくれたこと。アーティストを一度呼んだら、何作品か紹介するというのが彼の方針で、『エッグ』の招聘公演の頃には、“今度は『ジャポニスム 2018』のときに呼びたい。何かいい作品はないか？”と打診がありました。それで、いくつか候補を挙げたところ、彼が選んできたのが『贋作 桜の森の満開の下』だったんです」

1989年の初演の後、2度再演され、2017年に歌舞伎化もされた『贋作 桜の森の満開の下』は、ヒダの匠の弟子・耳男と彼を翻弄する無邪気で残酷で美しい夜長姫を軸に“幻のヒダ王朝”を巡って描かれる人と鬼の壮大な物語だ。次々と展開していく場面は、時に妖しく眩惑的で、特に桜の花びらが降りしきる終盤のシーンは凄絶なまでに美しい。

ベースにあるのは、戦後の日本を代表する作家・坂口安吾の短編伝奇小説『桜の森の満開の下』と『夜長姫と耳男』。そこに歴史観を含む他の安吾作品のエッセンスや、野田が好きだと言う安吾の“虚無の時代をいかに強く生き残るか”という思想や、ものづくりをする人間の業と美学、そして野田戯曲特有のふんだんな言葉遊びがちりばめられ、まさに、安吾の世界と野田の才能が結実した作品になっている。

その劇世界を今回形にするのは、野田が「せつかく日本を代表して『ジャポニスム 2018』で上演するからには、考え得る限り最高のカンパニーにしよう」と集めたキャスト30人と一流のスタッフだ。耳男と夜長姫を『エッグ』にも出演した妻夫木 聡と深津絵里、美しき皇子を未婚の女性のみで構成された100年以上の歴史を持つ宝塚歌劇団の元男役トッ

プスター・天海祐希が演じ、山賊マナコをに“怪優”の異名を持つ古田新太、ヒダの王を野田が演じる。

「桜＝日本みたいなイメージがあると思うし、実際、日本の古代が舞台の話ではあるんだけど、おそらく日本のことをかなり知っているであろうパリの人達に、僕が日本、日本したものを見せてもに“ふーん”という感じでしょうからね。今回は演出をガラリと変えて、シンプルな道具を色々なものに見立てて表現しようと思ってます。まあ、“見立て”も日本の伝統的な手法ではあるんだけど」

ちなみに、『エッグ』の時と同じ翻訳者が、今回も言葉遊び満載の野田の台詞をフランス語の字幕に訳すという。

「村上春樹作品をフランス語に翻訳している人で、直訳というよりエッセンスを生かして訳してくれます。『エッグ』が好評だったのも、その翻訳によるところが大きいかもしれない。きっと村上春樹作品のほうが訳しやすいでしょうけどね(笑)」

かつて野田は超人気劇団を主宰していた。日本特集を企画するために来日していた英国エディンバラ国際演劇祭の委員長が、その劇団公演を観て1987年の同演劇祭に招聘。帰りに立ち寄ったロンドンの演劇環境に刺激を受けたことが、野田が劇団を解散して1年間ロンドンに留学するきっかけとなった。留学から帰国した野田は自身の作品を上演する企画・製作会社を設立し、海外の演劇人との協働も開始。10年前からは東京芸術劇場の芸術監督にも就任し、国内外の演劇人を劇場に呼ぶ側にもなっている。

本作品は、そんな現在の野田の一つの集大成といえるかもしれない。観ればきっと、そのめくるめく劇世界と唯一無二の才能に魅せられるはずだ。

野田秀樹 (のだ・ひでき)

1955年生まれ、長崎県出身。東京大学在学中に「劇団夢の遊眠社」を結成。92年に劇団を解散し、1年間のロンドン留学を経て、93年に演劇企画・製作会社「NODA・MAP」を設立。以降はプロデュース公演形式で、次々と話題作を発表。09年10月、名誉大英勲章 OBE 受勲。11年6月、紫綬褒章受章。現在、東京芸術劇場芸術監督、多摩美術大学教授。

野田秀樹演出『贗作 桜の森の満開の下』

作・演出／野田秀樹 出演／妻夫木聡、深津絵里、天海祐希、古田新太、秋山菜津子、大倉孝二、藤井隆、村岡希美、門脇麦、池田成志、銀粉蝶、野田秀樹 ほか

9月1日～12日 東京芸術劇場

9月28日～10月3日 パリ・国立シャイヨー劇場

1 Place du Trocadéro, Paris

10月13日～21日 大阪・新歌舞伎座

10月25日～29日 福岡・北九州芸術劇場

11月3日～25日 東京芸術劇場

(P.032)

自身が芸術監督を務める東京芸術劇場にて。

(P.033・左上)

NODA・MAP『贗作 桜の森の満開の下』の宣伝ビジュアル。上からキャストの天海祐希、深津絵里、妻夫木聡、古田新太。

(右上)

こちらも同作品の宣伝ビジュアル。右上から時計回りに、村岡希美、秋山菜津子、藤井隆、野田秀樹、門脇麦、銀粉蝶、大倉孝二、池田成志。

河瀬直美

— 映画

p.034

「ジャポニスム 2018」公式オープニングで新作『Vision』の特別上映が行われた映画監督、河瀬直美。その半生を、インスタレーション、映像などさまざまな表現で紹介。また初期の短篇から最新作『Vision』まで、カンヌ国際映画祭受賞作品を含めた映画作品とプロデュース作品の計約40本を一挙に上映します。

故郷の森は、彼女に何をもたらしたか

1997年に自身初の劇場映画『萌の朱雀』でカンヌ国際映画

祭カメラドール（新人監督賞）を史上最年少受賞し、2007年には『殞の森』で同映画祭のグランプリを受賞。また2015年にはフランス芸術文化勲章シュヴァリエを受章した河瀬直美さんは、間違いなく、フランスが最も愛する日本人映画監督の一人だろう。

7月半ばに「ジャポニスム 2018」公式オープニング事業としてパリで特別上演された新作『Vision』には、フランスの名女優ジュリエット・ピノシュが、国際的に活躍する日本人俳優・永瀬正敏とともに主演。フランス人エッセイストのジャンヌと山守の智 (Tomo) を軸に、河瀬監督の故郷・奈良の吉野の森で展開する、死と再生の物語だ。

「吉野の森は、杉と檜の植林地として500年の歴史を持っています。もう一度森と向き合いたい、その植林の歴史と技術を今しっかり継承しておかないと、森が死んでしまうという思いから、山守という存在を主に置いて表現したいと考えました。木も森も1代限りのものではなく、子や孫へと受け継いでいくもので、それはまさに“命を繋ぐ”こと。木は雨の日も風の日もそこに立ち、たとえ人に切られても何も言わず、人の営みを見守っている。そういうものを撮りたいなど」

11月23日から、そう話す河瀬監督の半生をテーマにした『河瀬直美監督特集 特別展・特集上映』が、現代美術の殿堂、ポンピドゥー・センターで開催される。同センターからの熱い要望で実現した企画で、河瀬監督が今回初めて制作した、24枚の和紙のスクリーンを使ったインスタレーション作品が展示されるほか、初期の短篇から最新作まで、カンヌ国際映画祭受賞作を含む作品とプロデュース作品の計約40本が一挙に上映される。

「インスタレーションでは、故郷・奈良を強く意識しました。私が撮る映画同様、“人生”“人類”“生きる”“つながる”にテーマを置いています。24枚のスクリーンには、一つ一つの想いが隠されていて、それらが繋がり合い、物語という一つの大きな流れへと昇華する。映画、映像へのオマージュにもなっています」

また、フランス国内では『Vision』が11月28日から一般公開される。その後、スペイン等でも一般公開の予定だ。

河瀬直美 (かわせ・なおみ)

映画監督。生まれ育った奈良を拠点に映画をつくり続ける1児の母。一貫したリアリティの追求はドキュメンタリー、フィクションの域を超え、世界各国の映画祭で受賞多数。「なら国際映画祭」(2018年は9月20日～24日に開催。http://nara-iff.jp)を通して、次世代の育成にも力を注いでいる。

河瀬直美監督特集 特別展・特集上映

11月23日～2019年1月6日

パリ ポンピドゥ・センター

Place Georges-Pompidou, Paris

『Vision』

監督・脚本/河瀬直美 出演/ジュリエット・ピノシュ、永瀬正敏、岩田剛典、美波、森山未来、田中泯(特別出演)、夏木マリほか
vision-movie.jp

縄文 ——展示

p.035

1万3000年ほど前から約1万年以上続いた縄文時代。日本中から出土している土器や土偶、装身具などの国宝や重要文化財が、今回、フランスへと渡る。2018年に「星降る中部高地の縄文世界」として日本遺産に認定された山梨県の出土品を中心に、縄文の魅力を紹介しよう。

※この特集で紹介する土器は「ジャポニスム2018」出展未定のものも含む。

すいせんもん 水煙文土器

4500年ほど前に作られた最大高約72cm、最大径約60cmの土器。上部に4つの装飾が施されているが、その一つ一つの形状が異なっている。これだけ重みのある装飾がありながら、下の壺の部分がつぶれることなく焼成されている。野焼きしかなかった縄文時代、どうやってこのような形の土器

が作れたのか、現代に至るまで解明されていないという。重要文化財。

积迦堂遺跡博物館

山梨県笛吹市一宮町千米寺764 Tel. 0553-47-3333

開館時間 午前9時～午後5時 休館日 火曜、祝日の翌日、年末年始 入館料 一般・大学生200円 小中高生100円

p.036

中空土偶

奇跡的にどこも破損せず、この状態のまま発掘された約2500年前の土偶。何に使用されたものかは不明だが、宗教行事に用いられたのではないかとされている。中空状態なので、水や酒などを注ぐものだったという説もある。

縄文——日本美の原点がここにある

氷河期が終わりを告げ、日本列島が温暖で湿潤な気候へと移行したのがちょうど1万3000年ほど前のこと。縄文時代の幕開けである。現在我々が目にすることのできる山や森、川や海といった景観、そして四季がこの頃整ったといわれている。森では木の実が採れるようになり、狩猟や漁撈も可能になったこの時代、人々はいろいろな道具を作り始めた。木の実をすりつぶす道具、煮炊きするための器、獲物を捕らえるための武器、祈りの儀式のための道具——。それらは今なお日本各地から出土し続けている。

当時暮らしていた人々のことを、現代では「縄文人」と呼んでいる。彼らが残した土器に施された縄目文様がその由来だ。単純に撚った縄や複数の紐を撚り合わせたものを土器に押し付けたり、さらに細竹を二つに割った半円の断面で直線や曲線を描いたりすることで、彼らは土器に多彩な文様を描き出した。時代を経るとともにその文様はどんどん装飾的になり、約5000年前には成熟期を迎えることとなった。

「ジャポニスム2018」の公式企画の中でも大きな注目を集めている展覧会「縄文——日本における美の誕生」では、日本各地で出土した土器や土偶が展示される予定だが、こ

の特集では山梨県の縄文土器に絞ってご紹介しよう。このエリアの縄文土器の個性はなにかというと、それは「非常に大きいこと」そして「世界に類を見ない中空の立体装飾」であることだ。ろくろもない時代である。こんなにも底が小さく、しかも重みのある立体装飾が上に積みあがった巨大な土器を、いったいどうやって成形したのか。窯はなく露天で野焼きをしていたにも関わらず、なぜこんなにもムラなく美しく焼き上げることができたのか。これは現代の知恵と技術をもってしても、未だ解明できていない謎の一つだという。そして圧倒的であり、完成された文様の力もまた特筆すべきものだろう。近年、日本で縄文土器が見直されているのは、このグラフィカルなデザイン力への驚きが発端となっている。フリーハンドで、縄や竹の道具しかない中、それでも美しいものを作りたいという根源的な渴望が、5000年前に生きていた我々の祖先を突き動かしていたに違いない。なんとという人間力だろうか。

折しも2018年5月には、山梨県と長野県にまたがるエリアの縄文遺跡や出土品が「星降る中部高地の縄文世界」として文化庁から日本遺産に認定された。日本の美の原点ともいわれる縄文の魅力が、国境を超えて世界へと広まっていくのはまさにこれから。ジャポニスム2018「縄文——日本における美の誕生」は、その大いなる一歩となるに違いない。

顔面把手付深鉢形土器

約5000年前に作られた煮炊き用の土器。どんぐりなどそのままでは食べられない堅い木の実が、土器に入れて煮ると食べられるようになることから、命が生まれ変わる＝出産という意味をこめて、土器を母体に見立てた。生命が生まれること、食べることで命が繋がることへの畏怖の思いが込められている。正面から見ると壺の口に顔、壺の胴体部分には股の間から顔を出した赤ん坊が描かれている。また裏側には目を剥いた女性の顔と赤ん坊が描かれ、出産の苦痛を表しているという説もある。山梨県有形文化財。

北杜市考古資料館

山梨県北杜市大泉町谷戸 2414 tel.0551-20-5505

開館時間 午前9時～午後5時 休館日 月曜、祝日の翌日、年末年始
 入館料 一般・大学生200円 小中高生100円

p.038

深鉢形土器

粘土紐を貼り付けた盛り上がった線と、^{はんにくぼり}半肉彫による^{ちんせん}沈線のくぼみで、シンメトリーに描かれた曲線文様。フリーハンドでここまで精緻な文様が描けたことに驚嘆を禁じえないこの鉢は、高さ72cmとその大きさにも圧倒される。約5000年前に作られた土器とされている。重要文化財。

山梨県立考古博物館

山梨県甲府市下曾根町 923 tel.055-266-3881

開館時間 午前9時～午後5時 休館日 月曜日、祝日の翌日、年末年始
 入館料 一般・大学生210円 小中高生無料

「縄文——日本における美の誕生」展

10/17～12/8

パリ日本文化会館

101 bis, quai Branly 75015 Paris, France

p.039

イベントガイド

8ヶ月間にわたりパリを中心に50を超える展示会、舞台公演、生活文化体験などの多様な公式企画が開催される「ジャポニスム2018」。その中でも特に話題のイベントをピックアップした。普段フランスでは経験することができない本格的な日本の文化体験を、是非この機会に様々な角度から楽しんでもらいたい。

1. 茶の湯

総合芸術と言われる茶道。その魅力の一つである、人を敬い、和を大切に、物事に動じない、お茶の精神「和敬清寂」を伝えるのがこの企画の目的。広く一般から参加者を募る茶

会や茶道具展示、講演会等を通じて茶の湯の美学を味わってもらいたい。

2019年2月（調整中）

パリ日本文化会館、ギメ東洋美術館別館ホテル・ハイデルパッサ 他

2. ルーブル美術館ピラミッド内

特別展示 名和晃平 彫刻作品“Throne”

国内外で活躍する彫刻家・名和晃平の、高さ10m以上もある大作“Throne”が、ルーブル美術館ピラミッド内で特別展示される。3D造形システムを用いて作られた立体彫刻に、日本の伝統工芸の一つである高度な金箔貼り技術きんぱくを施した作品は一見の価値あり。

2019年1月14日まで

ルーブル美術館・ピラミッド内

Throne © Kohei NAWA | SANDWICH Inc.

3. 野村万作・萬斎・裕基×杉本博司

『ディヴァイン・ダンス 三番叟』

日本を代表する狂言師と現代美術作家が、舞台上に古代の神話的空間を再現し、そこで狂言を舞うという、意欲的な公演。伝統芸能である「狂言」は庶民の日常的な出来事を、笑いを通して表現する喜劇で、今回上演されるのは神が降霊する様を表した「三番叟さんぱんそう」と、人間の心の表裏を描いた「月見座頭つきみざとう」の2演目。

9月19日～25日（9月23日休演）

パリ市立劇場 エスパス・カルダン

『三番叟』野村萬斎 © 公益財団法人小田原文化財団

4. 「MANGA ⇄ TOKYO」展

「東京」をテーマにしたマンガ・アニメ・ゲーム・特撮作品などの原画や模型、映像の展示会。日本を代表する文化の一つとして知られるマンガなどのフィクションは、絶えず都市の特徴や変化を映し出してきた。それらの作品を通して、

東京という街について理解を深めることができるだろう。

11月29日～12月30日

ラ・ヴィレット

イラストレーション: 吉成曜よしなり

©Crypton Future Media, INC. www.piapro.net / ©カラー / ©武内直子・PNP・東映アニメーション / ©秋本治・アトリエびーだま / 集英社 / ©創通・サンライズ / ©TOHO CO., LTD.

5. 「安藤忠雄 挑戦」展

海外から大きな注目を集めている日本の建築家。その先駆者の一人、安藤忠雄は斬新なデザインが評価され日本はもちろん、アジア、ヨーロッパ、アメリカなど各国で活躍している。彼の半世紀にわたる活動とこれからの展望を模型、スケッチ、ドローイングや映像を通して紹介する。

10月10日～12月31日

ポンピドゥー・センター

< 光の教会 > 大阪府 1989年、撮影：松岡満男

6. いけばな

日本の伝統文化、芸術として親しまれているいけばな。5つの有名流派がパリに集結し、作品の展示や実演、ワークショップなどを通して、その様式や技法を紹介する。草花を觀賞するだけでなく、自然を尊び、その中に美しさを見出す日本人の価値観にも触れられるだろう。

2019年1月30日～2月2日

パリ日本文化会館

7. 現代演劇シリーズ—木ノ下裕一監修・補綴 杉原邦生演出・美術 木ノ下歌舞伎『勸進帳』

歌舞伎の歴史的文脈を踏まえつつ、現代風にアレンジし新たな歌舞伎を追求する演劇団体・木ノ下歌舞伎。今回上演される『勸進帳』は歌舞伎十八番の一つで、源義経と家来の弁慶の忠義の物語を描いた人気の演目。多くの人が知っ

ている『勸進帳』とは一味違う演出を楽しんでもらいたい。

11月1日～3日

ボンビドゥ・センター

提供：KYOTO EXPERIMENT 事務局 ©Yoshikazu Inoue

この特集のイベント情報は 2018 年 8 月 17 日現在のものです。

最新情報は下記 URL をご覧ください。

japonismes.org